

日本海新聞

2月12日(木)

2015年(平成27年)




発行所

新日本海新聞社
〒680-8688 鳥取市富安2丁目137
電話(0857)21-2888(代表)

西部本社
〒683-20 米子市南三柳3060
電話(0859)34-8811(代表)

中部本社
〒682-8505 倉吉市上井町1丁目156
電話(0858)26-8300(代表)

郵便振替 01470-7-8099

見て知る地域の  
日本海新聞 

ゲル状の水 正確に投下

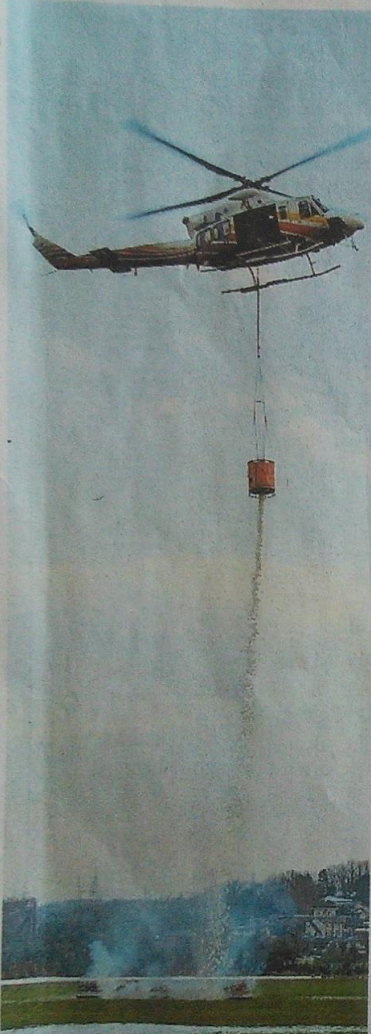
鳥取大と米子の企業が 効果的な消火法開発

森林火災や都市火災で効果を発揮する新たな消火剤と投下システムを、鳥取大と米子市の企業が共同開発した。ゲル化(ゼリー状に凝固)した水が詰まったパックを空から投下することで、安全かつ正確、迅速に消火できるようになった。11日に鳥取市の鳥取大で投下実験が公開された。



水をゲル状にした消火剤が入った紙パック

商品開発事業などを展開するイルカカレッジ(米子市、朝山規子社長)と鳥取大が、消防庁の委託を受け3300万円かけて開発。世界では年間1400万枚の森林が焼失しており、実用化すれば産学官連携で生み出された「鳥取発」の技術が人命救助や環境改善に役立つ可能性がある。森林火災の消火は通常、航空機で上空から水を投下するが、高度が高くと霧状になるため十分に火元に届かない。消火効率を上げる方法として同社と鳥取大は、寒天の製造に使う食用のゲル化剤に着目。水を混ぜてゲル状の消火剤をつくり、上空から投下することで、霧状にせず確実に火災の中心に届くようにした。GPS受信機と赤外線カメラで投下位置を計算するシステムも開発した。



ゲル状に固めた消火剤を上空から投下する県消防防災ヘリコプター=11日、鳥取市の鳥取大

性の小型の紙パックに入っており、5分間水に漬けると重さ100gの消火剤になる。落下の衝撃で破裂し、飛び散ったゲル状の水が酸素の供給を絶つ。動物が食べても安全という。

実験は東部消防や県の協力で実施。県消防防災ヘリコプターが高さ30m地点から消火剤を落とした。3回のうち2回は落下地点がずれたが、最後の実験では約2千個のパックが火元に命中し、火が消し止められた。

担当する鳥取大大学院工学研究科の松原雄平教授は「森林火災だけでなく、南海トラフ地震など国内の大規模災害でも効果を発揮する」と強調。朝山社長は「インドネシアの火災現場でも実証し、鳥取から世界を救つこの事業を成功させたい」と話していた。